様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(S)
研究期間：2011～2015
課題番号：２３２２１０１２

研究課題名（和文）アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究

研究課題名（英文）Comprehensive Area Studies on Coexistence and Conflict Resolution Realizing the African Potentials

研究代表者
太田　至（Ohta, Itaru）

京都大学・学内共同利用施設等・教授

研究者番号：６０１９１９３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　157,600,000円

研究成果の概要（和文）：　現代のアフリカ諸社会は、紛争によって疲弊した社会秩序をいかに再生させるのかという課題に直面している。本研究では、アフリカ社会には人々が紛争の予防や解決のために自ら創造・蓄積し運用してきた知識・制度・実践・価値観（＝アフリカ潜在力）が存在すること、それは西欧やイスラーム世界などの外部社会との折衝・交渉のなかで不断に更新されていることを、現地調査をとおして実証的に明らかにした。
　本研究ではまた、「紛争解決や共生の実現のためには民主主義や人権思想の浸透がもっとも重要である」といった西欧中心的な考え方を脱却し、アフリカ潜在力は、人々の和解や社会修復の実現のために広く活用できることを解明した。

研究成果の概要（英文）：Contemporary African societies face the task of how to prevent conflict and violence, and how to reconstruct the social order exhausted by conflicts. This research revealed that African people themselves have created, accumulated, and managed knowledge and social institutions (African Potentials) that have proven to be effective in resolving conflicts and achieving coexistence. This research also elucidated that African Potentials were/are constructed out of repeated collision and integration with the outside influences of the West and the Arab/Islamic world.
 This approach of our research project is markedly different from trying to find solutions through simply importing and applying concepts and values of Western origin, such as even democracy and human rights. This research demonstrated that African Potentials can be applied to contemporary conflict resolution, reconciliation among peoples, and the post-conflict reconstruction of society.

研究分野：アフリカ地域研究、人類学

キーワード：アフリカ　紛争と共生　ローカルな潜在力　和解と社会的修復　在来の知識や制度　国際社会　地域研究　国際研究者交流

１．研究開始当初の背景

現代アフリカ社会は、とくに 1990～2000 年代に大規模な内戦や地域紛争を経験してきた。そのなかには、100 万人近い人々が虐殺されたルワンダや、国民の大部分が難民や国内避難民になったリベリアなど、深刻な事態がふくまれる。また、大規模な内戦・紛争以外にも、多種多様な紛争が日常的に生起している。たとえば、東アフリカ牧畜社会における家畜の略奪にともなう暴力的衝突や、アフリカ各地の農耕民と牧畜民の土地利用をめぐる対立、環境保全（国立公園の設立など）や開発計画（大規模農業や石油採掘など）の実施にともなって強制移住させられた人々や外国人労働者と地元民の争いなどである。

深刻化するアフリカの紛争に対処するために、国際社会は、国連・AU の PKO や多国籍軍の派遣、経済制裁、停戦・和平協定の締結と紛争後の制度構築、あるいは国際刑事裁判所などによる司法介入といったかたちで関与し、それは紛争の鎮静化に一定の効果をあげてきた。しかしながら国際社会のこうした介入を強力に主導してきたのは、基本的人権や民主主義といった思想や制度であり、あるいは、人権侵害や暴力に対しては「法という正義にもとづく処罰」をするという欧米出自の価値規範である。

このような介入の根底には、「アフリカ社会は紛争解決の仕組みを欠いているため『正しい』方策を国際社会が提供する」という発想があることはまちがいない。そして、こうした外部からの介入は一定の成果をあげたものの、紛争によって疲弊・解体した社会関係を修復するためには、ほとんど効力をもたなかった。

２．研究の目的

これに対して本研究は、まったく異なる立場を採用した。すなわち、アフリカ社会には人々が編み出し運用してきた知識や制度（＝潜在力）が存在し、それが紛争解決と共生を実現するために有効であったし、現在もそれは活用できるという立場をとったのである。

しかしこれは、アフリカには「伝統的」「内在的」で不変の知恵があるとか、国際社会の介入はすべて「外からの押しつけ」であるから有効にはたらかないといった、排他的で閉鎖的な主張ではない。アフリカの「伝統」を固定化しロマン化することは、本研究がもっとも批判する態度である。アフリカの人々の知識や実践は、西欧近代やアラブ／イスラームといった外部世界からの影響と、つねに衝突や接合を繰り返しながら、変革・生成されてきた。その意味においてアフリカ社会は、外部と折衝しつつ問題対処能力を更新してゆくための高い能力（＝インターフェース機能）を備えている。

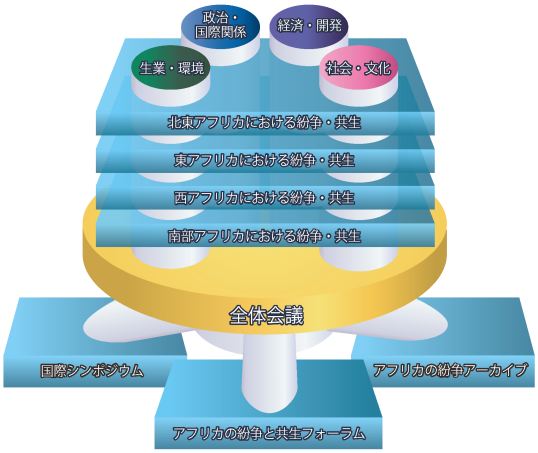
こうしてアフリカ人が創造し、蓄積・運用してきた自前の処方箋は、紛争後の社会秩序（＝共生）を構想するためにも有効である。本研究の目的は、「アフリカ潜在力」を解明し、それを紛争解決と共生の実現にむけて活用することを提唱するところにあった。

具体的には、以下の４つの課題を設定した。(1) 多元的な紛争が発生する機序とその実態を現地調査によって解明。(2) 紛争解決と共生の実現のためにアフリカ社会が有する知識や技術、価値や制度（＝潜在力）をフィールドワークによって多面的に実証。(3) 社会の外部（国際社会や地域機構、国家、NGO など）から移入される知識や技術、制度と上記の「アフリカ潜在力」との折衝・交渉・接合のメカニズムの記述・分析。(4) 国際社会の関与など、外来の紛争解決方法に関する国際関係論や国際法学、政治学などの研究成果と、「アフリカ潜在力」に関する分析を相互参照する過程をとおして、「アフリカ潜在力」の有効性を探究。

３．研究の方法

本研究は、アフリカにおける長期のフィールド経験をもつ多分野にわたる研究者を糾合して実施した。具体的には、研究代表者と研究分担者 15 名、連携研究者 2 名の合計 18 名を中核として組織し、若手研究者やアフリカ人を主体とする外国人研究者を、適宜、研究協力者としてメンバーに加えた。個々のメンバーは、それぞれにフィールドワークを実施しつつ、上記の 4 つの課題に取り組んだ。

有機的連関をもって研究全体を統合するためには、テーマ別に 4 つの「研究ユニット」（「政治・国際関係」「経済・開発」「生業・環境」「社会・文化」）と地域別に 4 つの「研究クラスター」（北東アフリカ」「東アフリカ」「西・中央アフリカ」「南部アフリカ」）を組織し、それを交差させた研究体制を構築した（下図）。



個々のメンバーは「ユニット」と「クラスター」の両方に所属して、研究会で議論を重ねた。その研究成果は、本研究の参加者全員で構成する定期的な「全体会議」の場で報告し、内容を共有・深化させた。すなわち「全体会議」は、常に包括的・総合的な研究を推進するための強力なエンジンとなった。

また、毎年 1 回、アフリカ各地で「アフリ

カ紛争・共生フォーラム」を開催した（計 5 回）。この会議にはアフリカ人研究者と実務家を招へいして、その地域がもつ歴史的・地理的・社会的な特徴を踏まえて、本研究の根幹をなす「アフリカ潜在力」という考え方について徹底的な討論を繰り返した。

本研究の成果を問うために、2013 年 10 月と 2016 年 1 月の 2 回、アフリカ人をはじめとする外国人研究者・実務家を日本に招へいして国際シンポジウムを開催した。また、アメリカ・アフリカ学会やカナダ・アフリカ学会、日本アフリカ学会など、国内外の多くの学会年次大会で「アフリカ潜在力」に関するパネルを企画して口頭発表と討論をおこなった。その成果は、その場での議論をふまえてさらに熟考を重ねて出版した。

４．研究成果

【研究の主な成果】

(1) アフリカではどのような紛争・もめ事が、いかなる主体間で起きているか

現在のアフリカで生起している紛争・もめ事は、複数の主体のあいだで複雑かつ重層的に生起している。たとえば、国家とローカルな共同体のあいだ、ローカルな共同体同士、移住民や外国人労働者と地元住民のあいだ、国際的な組織（環境保護や開発支援）や企業（大規模農業や石油採掘など）とローカルな共同体のあいだ、などである。同時に、国家とローカルな共同体のあいだのもめ事において、共同体の一部は国家の側についたり、ローカルな共同体同士の争いのなかで一部の人々は境界を越境して連携している。そのため、主体間に明確な境界線を想定すると、しばしば現実を誤認することになる。非常にローカルな紛争にも、国家や国際関係の動向がつよく影響している場合もある。

紛争の発生機序については、気象観測装置や衛星画像などをもちいて環境変動や土地利用の変化を精査し、それが現地住民間の争いとどのように関連しているのかに関する事例研究を進めた。その結果、サヘル地域では地球規模の環境変動と連動するかたちで砂漠化が進行しており、農耕民と牧畜民のあいだで土地利用をめぐる争いがおこり、ときには民族間の大規模な武力衝突に発展する経緯を詳細に解明した。

(2) 紛争・もめ事を解決し人々の共生を実現するために、アフリカ社会はどのような知識や技術、制度や価値観（＝潜在力）をもっているのか

アフリカの各地には、紛争やもめ事を解決し人々の共生を実現するために、自主的に組織・開催される集会が存在する。それは、誰もが参加して発言できる開放的なものであり、理屈をならべる陳述よりも、人々の情動にうったえる発言が主体となる。レトリックを駆使した雄弁さが高く評価され、しばしば「宗教的な正しさ」も言及される。こうした集会には調整役がおり、人々の創造的な議論を引き出す役を果たす。人々はねばりづよく他者に働きかけると同時に、他者の発言にも辛抱づよく耳をかたむけつつ交渉・折衝を続けて、最後には参加者全員が同意するかたちで結論が導かれる。このような集会は、違反者・犯罪者・加害者を処罰することよりも、当事者相互の癒しと共生をはかり、儀礼的な行為をとおして共同体の調和を回復することに重点をおいている。こうした集会の存在は、従来の研究でも指摘されてきたが、西欧出自の裁判が機能しない場所における「二流の代替策」とみなされることが多かった。本研究で広くアフリカ各地の事例を収集・比較し、「語りの力と聴く力」「ねばりづよい折衝」「癒しと共生」「調和の回復」「集合的な判断」などの共通の特質を抽出して、それを「アフリカ潜在力」としてポジティブに再評価したことは本研究の大きな貢献である。

(3) 「アフリカ潜在力」は社会の外部から移入される要素（知識や技術、制度など）と、どのような交渉・接合の回路をもつのか

上記のような「アフリカ潜在力」の特徴は、南アフリカの真実和解委員会やルワンダのガチャチャ裁判にも顕著に発現していた。すなわち「アフリカ潜在力」は国家や近代的裁判との相互関係のなかでも発揮されている。また、ケニアではイスラム教とキリスト教の聖職者が共同で組織する団体が地域紛争の解決にとり組んでいたり、多様な人々が混住する南アの都市ダーバンでも、住民がもめ事を自主的に解決する組織がうまく機能していること報告されている。すなわち人々は、ローカル NGO や宗教組織などの現代的な団体を中核としつつ、西欧やイスラーム世界から吸収した知識や価値観と在来のそれとを接合し、みずからの生活世界をより良いものにするための実践をおこなっている。

ただし、地方の有力政治家が自己の地位を確立するために(2) のような集会を利用することもある。また、国家や地方行政あるいは国際社会の支援をうけた団体が、ローカルな集会プロセスの一部だけを切り取って形式的な「和平儀礼」を開催することもある。このようなトップダウンなやり方や、断片化された儀礼の実施はまったく効力をもたない。こうした集会を、どんな文脈にも適用可能な技術のようにみなし、その実施を専門家にまかせて大衆を排除するという「アフリカ潜在力の乗っ取りと盗用」に関する理解を深めたことも、本研究の重要な貢献である。

(4) 「アフリカ潜在力」という考え方の彫琢

本研究では「アフリカ潜在力」という概念を彫琢し、それを紛争解決と共生の実現のために活用する方途を探究してきた。その過程では「在来」あるいは「伝統」とは何かという根源的な問いを避けることができないことが明らかになり、以下の結論を得た。①単純な二元論（伝統／近代、特殊的／普遍的、西欧／アフリカなど）は無用であり、「アフ

リカの潜在力」を本質化したり、特定の実体をもつものとみなすことはできない。②「伝統」「在来」「エスニック・グループ」「共同体」といった概念を所与のものとみなすことはできず、これらの概念で指示されるものは実際には可変的・状況依存的であり、つねに競合や交渉にさらされている。

このように、「伝統」を実体的なものと誤認してしまう視点を超克したとき、多種多様な人々や思想、文化、制度、情報、モノがアフリカ社会に流入し、そのなかで「伝統」「在来」「土着」とされてきた要素が再編成され、再創造されてゆく事態が明確に理解できるようになった。すなわち、歴史的にみるとアフリカの人々は頻繁な移動を繰り返しており、地域社会は異質な外来者を取り込みつつ変容してきた（「包摂性・流動性」）。また、大多数の人々は隣接民族の言語を理解する多言語話者であり、民族帰属も状況依存的であった（「複数性・多重性」）。さらにアフリカの人々は、みずからの生活世界をより良いものにするために、さまざまな知識や価値観を必要に応じて取り入れ、異なるものを接合させつつ新しい知識や制度を創造してきた（「混淆性・ブリコラージュ」）。

「アフリカ潜在力」は、こうした特性から構成されている。本プロジェクトでは、異なるものを繋ぎ、混淆させ、接合する能力を「インターフェイス機能」として抽出した。そして、その機能が十全に発揮されるところに作用しているコンヴィヴィアルな力こそが「アフリカ潜在力」の根幹であるという認識に到達した。

【得られた成果の国内外における位置づけとインパクト】

本研究では、紛争解決と共生の実現のためにアフリカ社会が有する知識や技術、制度、価値観としての「アフリカ潜在力」を、実証的・経験的な方法によって記述・分析してきた。同時に本研究では、従来の西欧中心的な考え方から自由になり、オルタナティブな思想や価値観を提出することをめざして、哲学的・原理的な視点から「アフリカ潜在力」という考え方を探究してきた。このような研究は国内外を見わたしても非常に独創的なものであり、今後のアフリカ研究におおきなインパクトを与えると考える。

【今後の展望】

本研究では「アフリカ潜在力」という考え方を、紛争解決と共生の実現という領域において探究し、その有効性を立証してきた。しかしながらアフリカの紛争は、独立した問題ではなく、環境や経済、開発、文化、ジェンダーなどの広範な課題と複雑に結びついている。そのために今後は、こうした諸課題の連関性を総合的に検証することにより、「アフリカ潜在力」に関する研究を、より汎用性の高いものに発展させること必要であり、それは大きな可能性をもっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 380 件）

① 佐川徹 2015.「紛争多発地域における草の根の平和実践と介入者の役割：東アフリカ牧畜社会を事例に」『平和研究』44: 1-19．査読有

② 高橋基樹 2015「現代アフリカ国家の特質：その歴史的・包括的理解に向けて」『国民経済雑誌』211(1):3－38．査読有

③ 松田素二 2013「地域研究的想像力に向けて：アフリカ潜在力の視点」『学術の動向』7 月号: 62-66．査読無

④ Abe, T. 2012. Reconciliation as process or catalyst: Understanding the concept in a post-conflict society. *Comparative Sociology* 11: 785-814. 査読有

⑤ Oyama, S. 2012. Land rehabilitation methods based on the refuse input: Local practices of Hausa farmers and application of indigenous knowledge in the Sahelian Niger. *Pedologist* 55 (3) Special Issue: 466-489.査読有

〔学会発表〕（計 343 件）

① Mine, Y. 2015. The basic concept of human security: Graphic illustrations. *The 5th Annual Conference of Japan Association for Human Security Studies*, December 13, 2015, International Christian University, Tokyo.

② Nishizaki, N. 2015. Dynamics of community-based cultural tourism in southwestern Ethiopia, *19th International Conference of Ethiopian Studies*, October 26, 2015, Warszawa, Poland.

③ 太田至 2014.「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現にむけて」日本アフリカ学会大 51 回学術大会、2014 年 5 月 24 日、京都大学。

④ Hirano-Nomoto, M. 2014. Urban voluntary associations as "African Potentials": The case of Yaounde, Cameroon. *IUAES 2014 Inter-congress*, May 16, 2014. Makuhari Messe, Chiba.

⑤ Ohta, I. 2013. Simultaneous yet contradictory relationships between the Turkana and refugees in Kakuma area, northwestern Kenya. *56th Annual Meeting of African Studies Association*, November 23, 2013, Baltimore, USA.

〔図書〕（計 52 件）

① 松田素二・平野（野元）美佐（編）『紛争をおさめる文化：不完全性とブリコラージュの実践』（アフリカ潜在力シリーズ 太田至 総編集 第 1 巻）京都大学学術出版会．374 頁

② 遠藤 貢（編）2016.『武力紛争を越える：

せめぎ合う制度と戦略のなかで』(アフリカ潜在力シリーズ　太田至 総編集 第 2 巻）京都大学学術出版会．360 頁

③ 高橋基樹・大山修一（編）2016.『開発と共生のはざまで：国家と市場の変動を生きる』(アフリカ潜在力シリーズ　太田至 総編集 第 3 巻)京都大学学術出版会．428 頁

④ 重田眞義・伊谷樹一（編）2016.『争わないための生業実践—生態資源と人びとの関わり』(アフリカ潜在力シリーズ　太田至 総編集 第 4 巻）京都大学学術出版会．361 頁

⑤ 山越言・目黒紀夫・佐藤哲（編）2016.『自然は誰のものか：住民参加型保全の逆説を乗り越える』(アフリカ潜在力シリーズ　太田至 総編集 第 5 巻）京都大学学術出版会．311 頁

⑥ Moyo, S. & Y. Mine eds. 2016. *What Colonialism Ignored: 'African Potentials' for Resolving Conflicts in Southern Africa,* Mankon, Cameroon: Langaa RPCIG. 388 pp.

〔その他〕

① ホームページ（日本語）：http://www.africapotential.africa.kyoto-u.ac.jp/

② ホームページ（英語）：http://www.africapotential.africa.kyoto-u.ac.jp/en/

６．研究組織

(1)研究代表者

太田 至　(OHTA, Itaru)
京都大学・アフリカ地域研究資料センター・教授
研究者番号：60191938

(2)研究分担者

島田 周平　(SHIMADA, Shuhei)
東京外国語大学・国際社会学部・教授
研究者番号：90170943

池野 旬 (IKENO, Jun)
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授
研究者番号：40293930

松田 素二　(MATSUDA, Motoji)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50173852

重田 眞義 (SHIGETA, Masayoshi)
京都大学・アフリカ地域研究資料センター・教授
研究者番号：80215962

栗本 英世 (KURIMOTO, Eisei)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：10192569

高橋 基樹 (TAKAHASHI, Motoki)
神戸大学・国際協力研究科・教授
研究者番号：30273808

峯 陽一 (MINE, Yoichi)
同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授
研究者番号：30257589

遠藤 貢 (ENDO, Mitsugi)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：70251311

荒木 美奈子 (ARAKI, Minako)
お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：60303880

平野（野元）美佐 (HIRANO-NOMOTO, Misa)
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：40402383

山越 言 (YAMAKOSHI, Gen)
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：00314253

西崎 伸子 (NISHIZAKI, Nobuko)
福島大学・行政政策学類・准教授
研究者番号：40431647

大山 修一 (OYAMA, Shuichi)
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：00322347

阿部 利洋 (ABE, Toshihiro)
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：90410969

佐川 徹 (SAGAWA, Toru)
慶應義塾大学・文学部・助教
研究者番号：70613579

(3)連携研究者

武内 進一 (TAKEUCHI, Shinichi)
独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究員
研究者番号：60450459

海野 るみ (UMINO, Rumi)
お茶の水女子大学・基幹研究院・研究員
研究者番号：40456273